

天国からの種

津守 眞

赤ん坊は一人ひとり良い種をたずさえて天国から降りてくる。

これはたとえである。私は、赤ん坊から幼児へと成長する姿を見ながら、このたとえをしばしば考えた。

真実にふれた「たとえ」は行為の指針ともなる。

良い種

ここに書くのは、私の保育のひとつまでである。

三歳九か月になったその子は、その日、畳の部屋で

ひとり何かをしていた。私は何も言わないで見ていると、その子は障子の破れ穴に苦心して紐を差し込み、反対側から出そうと繰り返し試みていた。結局紐はすっぽ抜けて終わった。アイデアを思い付くこと、それを実現しようと試みることは子どもに与えられた天国からの種ではないだろうか。

そばに、金魚の絵の付いたガラスの風鈴が吊るしてあった。その子が手を触れたら落ちて割れた。私はその掃除に追われた。その間に、その子はシャボン玉を

作る洗剤を出してくれと言ひ、一緒に用意しているうち、大きな盥あらいを洗面所に出して欲しがった。一緒にシャボン玉を作る。私も床に寝そべって、シャボン玉をしながらその子と同じように声を出すと、うれしくてゲラゲラ笑った。シャボン玉と一緒に楽しんだ。子どもと一緒にいると、そこが天国のように思えてくる。

私は子どもが自分でし始めたことを大切にす。傍らで経過を見る。それを生かして私も何かをする。ガラスは割れたが、穏やかで楽しい半日だった。風鈴が割れたことが次の活動へと導き、この日の保育を助けてくれた。

天国の良い種を育てるのには、子どもが始めたことをまずだいにし、肯定し、それを共に味わい、一緒に生きる。それが育つ場である。

朝、その子は父と一緒に、玄関に飛び込んできた。大きな袋を持って、ネコが入っていると行って、ペンギンの縫いぐるみの大きいのが顔を出していた。ニコ

ニコして体中で笑っていた。箱を出してあげると、皆が乗れる舟を作ると行って、幾つかの縫いぐるみを入れたり出したり、熱心に遊んでいた。そのうちにティツシユの紙をためらいなく次々に出して、氷の海の雪をかきわけて、床全体が氷の海になる。ティツシユの雪と氷である。想像力によって、ただのティツシユが何にでもなる。もつたないとも思うが、この想像力を駆使するところを見ると、それに値する。海と舟、ピングー、ペンギン、浮き輪のイメージで、昼食まで続いた。ババちゃん（祖母）が主として遊び相手、私はそばにいて何かと手伝う用事がある。祖母と一緒に太陽のあたる縁側で遊んでいる光景は天国である。

悪

赤ん坊は天国からの良い種をたずさえて降りてくるというならば、悪もたずさえてくるのではないかと夜中に考えたが、それは抽象的、人為的な考えである。

こうして遊ぶ最中に身を置いていると、そこはどうしても天国である。そのうちに、子どもはいやおうなしに社会の悪にさらされるだろう。昼食が済んだらピデオを見ようかと言っていたが、私が庭の雑草を取り始めたら、自分から庭に裸足で降りてきた。肥料をやったり、バッタをとって虫かごに入れたり、私と一緒に働いていた。大きなミミズを見つけて手の上にのせた。穴を掘っていたが、手で掘っていて、指を怪我して、イタイと泣いた。小さい手袋を出してあげた。

おやつの後、ババちゃんと私とその子の三人で家の前の公園に行った。砂場の入り口をしめて、他の子を入れたくない。これは子どもの中にある悪なのか？

そうではないだろう。ある時期、子どもは親しい人と二人だけの世界をつくりたい、他の子を内に入れない、というのには、誰にでもある。それを天国とするかどうかはそこにいる大人のあり方にかかっている。よその女の子が鉄棒をしに来た。私共は帰りかけていたが、子どもは興味一杯で、鉄棒にぶら下がっているう

ちに、私共も一緒に砂場で遊び始めた。

公園の時計の長針が「5」なのを見て、「5」は何時？」と聞く。「次は？」と聞き、10時は夜だと言うと、「夜はどうしてくるのかなあ」「車からとびだすのかなあ」「星からとびだしてくるのかな。月からくるのかな。テーブルの下から、椅子の下から、積み木の下から？ 足の裏から？」「あ、そうだ、夜は夜の国から、朝は朝の国から」。

私は、こんなことを言う子がどうしてそばにいるのだろうと不思議に思い、幸せに思った。

砂糖の袋から「おさとうがとびだしてくる」と言っていてそれを上等なカップに入れた。

私は子どもがし始めるところから天国が飛び出してくると思った。幼児はどうしてこんなことが言えるの



だろう。

そのはじまり

数年前新しい赤ん坊が家に来たとき、新生児は天国から直接降ってきた人だと私は思った。やがて死ぬときは、人はひとりずつ直接天に昇る。生きている人間はその中間だ。

赤ん坊はじきに、おっぱいが欲しいと言って泣き、うんちをし、眠り、またおっぱい。うまくおならが出ないといってイライラし、うまくいったと喜び、人間の生活が始まる。生後八か月のとき、嵐の後、西の空に夕日が射した。赤ん坊は一筋の太陽の光を見て声をあげた。赤ん坊の感動がそこにあった。私も思わずウワーと声を出し、「キレイ」と言った。赤ん坊はニコリ笑った。私共にも一瞬ハッとする感動のときだった。大人と一緒に感動するときの子どもの喜び（本誌一〇四巻第一号）。大人が共感することによって、子どもの感動する心が育ってゆくことを私共は知った。

赤ん坊は天国から良い種をたずさえて地上に降りてくることが疑い得なかった。

一歳半になったとき、大きな赤い自動車の広告を見て、ウワーと声を上げた。そして、円筒形の積み木を三個並べ、立方体の積み木をその上に三個のせて感動を表現した。感動は行為として表現される。そういう話は限らない。

真実なものに感動する種はひき続いている。

子どもが始めたことに天国の種があると信じ、子どものすることにその子どもなりの理由があると信じて、私は保育をしてきた。そういう考えは子どもをわがままにするとしばしば言われた。だが、わがままにならないようにと考えるのでなく、違った感受性をもった子どもたちと地上でどう付き合うかを考えるのが保育ではないか。子どもが三歳になった頃から、地上には悪の種が一杯あるから、三歳を過ぎれば、悪の社会に対する備えをしなければならないのではないかと、私は時々考えた。果たしてそうなのだろうか。

毒麦のたとえ

種蒔きのたとえに続いて、福音書には次のように記される。

「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行つた。——僕（しもべ）たちが、『では行つて抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言つた。『いや、毒麦を集める時、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れるまで、両方とも育つままにしておきなさい。』と。」

忍耐をもつて、神様がどうされるかを見なさいという事ではないか。

この日の朝、私共の保育はそこから始まつた。私が居間の天井の電球をかかっていると、その子もやりがたがたした。

新しい電池を二本見つけた。電池には毒の水が入っているから、古い電池はビニール袋に入れて捨てるこ

とを話し、社会には悪いものもあることを話した。その子は前回に作りかけの水風船に気が付いた。その子はお祭りみたいに水風船を紐にぶら下げたいと言つた。短い紐を長くするには二本の紐を結べばいいと私は考えたが、その子は違うことを考えていたらしく、これじゃだめ、あれじゃだめと言つていたが、私にもよくわからないままに結んだら、端が余つた。その子は「ほら、いいでしょ、これはお飾りよ」と言い、それを飾りにした。思つていなかった素敵な水風船の列ができた。大人は自分の結論を先に出して一方的にやつてしまいがちなことを私は恥じた。もつと柔軟で大きな心にどうしてなれないのだろうか。

人間の中には欲という悪い種がある。果てしなく誰の中にもある。悪を大きく膨らませるのは大人である。しかし欲がすべて悪いわけではない。それは同時にどこまでも追求する自我の強さにもつながる。それがなかつたら、良いアイデアをやり遂げる力も生まれないし、世の中の發明や発見も生まれないだろう。自

分を捨てても他者に尽くす優しさも育たないかもしれない。子どもがし始めたことを信頼するのは教育の出発点ではないか。たとえ悪の種であっても、人間にはそれを訂正して良い方に向けていく力があることを私は信頼したい。また、大人には良い種を育てる力があることを信頼したい。

では、子どもの成長の過程で大人の基準からはずれる行動をどう見るか。常識からはずれることの中にも良い種があるだろう。隠されている微かに小さな良いものを見いだし、愛をもつてかかわるのが教育だと思う。子どもがそのとき幸せであることが第一だが、子どもの未来を望み見、子どもが参加する社会を望み見るのが教育である。毒麦をもそのままにしておけというのは、それすらもよく生かされる道があることを示唆している。

私の学校のひとりの母親が、六年生になった子どもの卒業間際にパウロの言葉を引いて私に話してくれた。

「わたしたちは知っているのです。苦難（トラブル）は忍耐を、忍耐は練達（経験）を、練達は希望を生むということを、希望はわたしたちを欺くことはありません」。

大人の期待する良い子でありつづける子どもはいない。乳児のとき食卓をかきまわして大人の生活に侵入し始めたときから、幼稚園、保育園でのしきたりやきまりに馴染まない行動の数々、子どもと大人との間のトラブルは絶えない。その間で苦勞しながら、さまざまな子どもの未来を開いていくのが保育である。保育することは忍耐を養われることである。その経験の上に、どんなことが起こっても崩れることのない希望が生まれる。その母親は、そのことを私に告げたいと思つて、寒風の中で話してくれたのだった。

それとは別に、社会には本当に悪い種もある。六十年前にあんなにも決意して歩き始めた理想に向かう道を捨てて、別の方向に走ろうとする現代の無節操と無知である。

（保育研究者）